

2018 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作受賞

デザイン系専門学校生の進路選択過程における他者との関わり

文学部 2 年 西山 祐平

デザイン系専門学校生の進路選択過程における他者との関わり

1. 問題の所在

本稿の目的は、デザイン系専門学校¹に通う学生が、高校在学時の進路選択過程で、親や高校教師などの他者とどのような関わりを持っていたのかを明らかにすることである。本節では、専門学校進学に関する先行研究の検討を通して、本稿の位置づけを提示したい。

教育社会学では、1980年代から専門学校進学に関する研究が着手されてきた。初期の研究では、専門学校は学力・経済的に大学進学が困難な高校生の代替的進路であると考えられていた。近藤・岩永（1985）は、大学の定員抑制により、大学の収容力を溢れた学力的に大学進学を望めない層を専門学校が引き受けてきたことを指摘している。また、矢野・濱中（2006）は、専門学校進学者は授業料の高さと大学の合格率を考慮して進路選択しており、学力不足に加え、経済的貧困により専門学校を選択していることを指摘している。

一方で、専門学校進学者は、専門学校での学びを魅力的に捉えて、積極的に進路選択しているとする指摘も次第に登場してきた。たとえば西田（2009）は、専門学校進学者の多くは、何らかの目標や希望を諦めて進路を再選択するが、専門学校を大学や短大の代替的進路とは捉えずに、独自の「専門性」志向のもとで進路選択していることを明らかにした。

従来の研究は、量的調査が中心で、専門学校を一括にしたものが多く、各々の専門分野による違い²が十分に分析されてこなかった。その反省から、鷲巢（2015）は、ビジネス系専門学校生を対象に、彼らは専門学校に進路を再選択する契機となる「志向性」を、独力ではなく、親や高校教師などの他者の関与をもとに形成していく可能性を示唆した。長谷川（2018）は、栄養士養成の専門学校生を対象に、彼らは親や高校教師、友達などの他者の意見を参考にしつつ、学力に代わる能力指標として、資格取得意識の向上による能力アイデンティティを再構築しながら、専門学校を選択していることを明らかにした。

このように、近年は各々の専門分野に特有の進路選択過程に着目した論考が蓄積されつつあるが、十分とは言い難い。鷲巢（2015）や長谷川（2018）は、資格取得を目指しやすい専門学校³に在籍する学生を対象とし、多くの学生が、親や高校教師の関与をもとに入学動機として資格取得による将来の保障志向を挙げるに至っている。必ずしも資格取得が就職に役立つわけではないとする見解もあるが、「文化・教養」分野に対する「衛生」、「商業実務」分野の専門学校の就職率の高さ⁴を踏まえると、資格取得と就職率を相関させる考え方は特異ではない。一方、「文化・教養」分野の専門学校生の場合、親や高校教師が将来の保障を理由に進学を勧めるとは考え難く、先行研究とは異なる他者との関わりを経験すると考えられる。ゆえに、確かに鷲巢（2015）や長谷川（2018）は、特定の専門分野に着目した点で貴重な仕事だが、安易に他分野の専門学校生の進路選択過程に適用することはできない。いくら強い進学希望を持っていても、主に学費を工面すると考えられる親や、適切な進路指導をとるべき高校教師などの他者の承認がなければ進学は困難なため、そこに

着目する社会的意義は大きいと考える。しかし、近年人気を高めている「文化・教養」分野の専門学校の学術的知見の蓄積はほとんどなく、学生の進路選択過程は看過されてきた。

よって、本稿では、「文化・教養」分野の専門学校のうち、漫画家やイラストレーターなどの ASUC 職業⁵就労者の養成を目指すデザイン系専門学校に在籍する学生 4 名へのインタビュー調査を通して、彼らの進路選択過程の解明を試みる。特に親や高校教師などの他者との関わりに着目することで、専門学校進学研究に新たな知見を提示したい。

2. 調査の方法

本稿で用いるデータは、2017 年 11 月～2018 年 9 月に筆者が独自に実施したデザイン系専門学校生 4 名への半構造化形式のインタビュー調査により得られたものである。調査協力者とは、筆者が彼らの在籍する専門学校の学園祭に訪問して出会った⁶。インタビューはそれぞれ約 1 時間である。聞き取り内容はすべて IC レコーダーに録音して、それをもとに逐語録を作成した。その後、彼らの語りをコード化し、データの分析を試みた。

調査協力者には、調査目的・プライバシー配慮・データの管理方法について、文書と口頭で伝えた。また、調査はいつでも自由に中止でき、中止した場合に不利益を被ることはないことも同様に伝えた。インタビュー時の調査協力者の属性は表 1 の通りである⁷。

以下、分析では、調査協力者の名前はすべて仮名とする。また、引用文中の筆者による補足は () 内に記し、語りの内容に支障がない範囲で語句を改変・省略した箇所もある。

調査協力者名 (仮名)	性別	在籍校	学年	専攻する領域	両親の学歴	出身高校	出身高校 ランク
カナ	女	X校(2年制)	1年	漫画・イラスト	ともに高卒	県立高校 (普通科)	下位
リョウ	男	X校(2年制)	2年	イラスト	ともに高卒	私立高校 (普通科)	下位
フミヤ	男	Y校(3年制)	3年	ゲーム CG	ともに高卒	県立高校 (普通科)	中上位
ダイスケ	男	Y校(3年制)	3年	漫画・イラスト →ゲーム CG	ともに大卒	市立高校 (デザイン科)	中位

表 1 調査協力者の属性 (インタビュー時)

3. 進学意欲の形成

まず、デザイン系専門学校生は、高校在学時以前にいかなる経験を通して、進学意欲を形成していたのかを確認する。分析の結果、高校在学時以前の環境の限界から生じる芸術活動に対する不足感と、特別な人物やイベントの存在が影響することが明らかになった。

カナは、中学校・高校では美術部に所属しており、イラストレーターになることを夢に見ていた。彼女は、部活動の展覧会に向けて創作活動に励んだほか、大手出版社が主催するイラストコンテストで入賞するなど学外の活動にも積極的に取り組んだ。ダイスケは、中学校では美術部に所属しており、卒業後はデザイン科が設置されている高校に進学した。

彼は、中学校時代の芸術部が、専門知識を持つ顧問の先生が不在であったうえに、「普段は遊戯王(=カードゲーム) やったりする」「サボり部」であったことにもどかしさを覚えていた。学外のコンテストに応募したり、高校選択時に専門性を重視したりする彼らの態度は、デザイン業界で生きることを目指すうえでの上昇志向を示している。このように中学校・高校の環境の限界から生じる不足感を埋め合わせ、さらなるレベルアップを図る手段として、デザイン系専門学校が選択されている。

さらに彼らの進学意欲を強化するのが、特別な人物やイベントの存在である。フミヤは、高校3年生の時に教室で座席が隣接していた「漫画家」の影響を受けた。

高校3年生の夏くらいから、そろそろ進路を決めなきゃって時期で、みんな。まだ僕決まっていなかったんで、どうしようかなあって思ってたところ、友達がその、漫画家だったんですけど、その漫画家の人とちょっとした落書きみたいな感じで絵を描いてみたら、「才能あるじゃん」みたいに言われて。「そういう道どうなの？」って言われたから、あ、そうだなって思って。ちょうど絵を描くのも好きだったんで、それを仕事にできたらいいなあって。(中略) 大学の方も一応考えてて、理系だったので建築方面に進もうか悩んでたんですけど、やっぱり好きな方を選びました。

フミヤは、「物理とかその辺のいろんな知識を利用できたらいいな」と建築を学べる大学への進学も視野に入れていた。ところが、「漫画家」との出会いを通して、大学進学は理系科目を学ぶ自分の適性に合うものではあるが、興味・関心を掻き立てるものではないことに気づいた。「担当さん」がいるほどの実力を持つ「漫画家」の称賛は、フミヤの専門学校進学の原因力となった。彼らの進学意欲は、特殊な人物との関わり以外にも、特定のイベントによって強化される場合がある。たとえば、カナは中学3年生の時にショッピングモールで開催されていたデザイン系のイベントに参加して衝撃を受けた。その時に抱いた「絵で自分の気持ちを伝えるとか、絵の魅力を伝えるっていうのを、自分でもやりたいな」という熱意は高校在学時まで継続し、進路選択時にも大きな拠り所となった。

ただし、この段階ではまだ親や高校教師との関わりが希薄なため、リョウが美術大学(以下、美大)を視野に入れたように、類似の進路への進学意欲が形成されている場合もある。

4. 進路選択過程における他者との関わり

4.1. 親との関わり

調査協力者に共通していたのは、専門学校への進学希望を両親に伝えた際、否定的な立場をとられなかったことである。親との関わり方は、大きく2つのケースに分けられた。

第1に、子供の主体性に完全に依拠するケースである。カナは「お前の好きなところ行きゃいいよ。(中略) とりあえず挑戦してダメだったらダメで良くて、挑戦すればいいよ」と、リョウは「やっぱ、そうかあ。じゃあ、頑張りな」とあっさり承認された。フミヤ

は「ほんとにそれでいいのか？」と訊かれただけで、「じゃあ好きなようにしろ」と言われた経験から、家庭の教育方針を「基本、放任主義」だと認識していた。

上記3名は、両親の最終学歴が高卒である点で共通している。武内（1982）は、親の学歴はしつけ態度や学校文化、生徒文化を媒介して生徒に影響を与えることを指摘し、親の学歴と子供の大学進学へのアスピレーションには正の相関があることを明らかにしている。彼らの家庭内における学歴に対する価値観は、カナの語りが参考になる。

親の学歴はあまり知らないんですけど、父親は工業系の高校に行っていたのは知ってるんですよ。大学の方は、よく分からないんで、（最終学歴は）たぶん高卒だと思うんですよ。それくらいしか分かんないです。母も全く。そういう学校の話とかしないんで、ほんとに。

このような学歴に無頓着な環境下では、彼らの進学希望が承認されやすかったことが推測される。彼らの親は、子供の進路を積極的に承認しているというよりも、高校卒業後の進路に関する知識が浅薄であるため、不干渉の姿勢をとっていると捉えられる。

第2は、子供の興味・関心を認めつつも進路の再検討を促すケースで、ダイスケの家庭に当てはまる。ダイスケの両親の最終学歴は大卒である。彼の家庭内では進路選択に関してどのような方針がとられていたのだろうか。ダイスケは次のように語る。

親父の方はやってこいみたいな感じで。高校からデザイン科だったんで、やれることやってこいみたいな感じで。母はやっぱり最終的に就職をしたときに、美大行ったのと専門学校行ったのとで、（収入が）月3万くらい会社で違うって、そういうことを調べたうえで言ってるのかって、改めて釘を刺されて。確かにその辺も考えた方がいいかなって思いなおして、改めて自分で調べなおして、母に話しに行きました。考えは変わらなかったです。

母親は収入の格差を理由に美大を勧めつつ、ダイスケの興味・関心を否定せず、学歴主義的な価値観を説いてもいない。ダイスケの姉2人と兄1人は、みな普通科高校を卒業後、大学へ進学しており、いかにも大学進学が歓迎されるような環境である。それでも進路が承認されたのは、一度は生じた学歴主義的な価値観が崩壊したためだと考えられる。ダイスケは4人兄弟の末っ子として、「先に（大学に）行った姉とか兄もあんまり楽しそうに見えなくて、何をやっているのだ」と、無気力な大学生活を送る姉と兄に違和感を抱いていた。彼の思考は、家庭内で暗黙のうちに共有されていた大学進学を当然とする雰囲気逆を逆にして、学歴にとらわれない進路選択が受け入れられやすくなったと考えられる。

つまり、彼らの家庭内では、学歴主義的な価値観が生成される土壌がそもそも存在しない、あるいは一度は生成されても崩壊するために、共有されていない。ゆえに彼らの家庭

内においては、学歴を至上とする進路指導者が不在であり、たとえ非学歴主義的な進学希望であっても、半ば当然のごとく承認される環境が整っていたのである。

4.2. 高校教師との関わり

次に、高校教師とはどのような関わりを持っていたのかを確認していく。分析の結果、親と同様に、生徒の進学希望に対して真っ向から否定的な立場をとる者はいなかった。高校教師との関わり方は、大きく2つのケースに分けられた。

第1は、高校教師が積極的に専門学校進学を支援するケースである。カナの担任の高校教師は、自身が高校時代に後悔した経験をもとに、カナの進路の後押しをした。

学校の先生が、高校の時に、なんか同じ環境というわけじゃなかったんですけど、すごいそういうイラスト系に行きたかったらしいんですけど、その担任だった先生が「そんなんじゃ食べてけないよ」って言われて諦めちゃったというのがあったんで、それがすごく悔しかったのを私に話してくれて、だから「カナさんは諦めないで頑張っただけ」という後押しをされましたね。

高校教師はかつて夢を諦めた自分を反ロールモデル化し、カナを応援している。カナは、高校教師とのやり取りを通して、「ああ、頑張ろ」と自分の進路に自信を持つことができた。また、リョウはX校への進学を決める前、美大への進学も考えていた。そのことを三者面談で担任の高校教師に伝えた際、高校教師は現実的なアドバイスをした。

最初は美大に行きたいなと思ってて、美大はほんとにめちゃくちゃお金がかかるって三者面談で言われて、そのとき先生に「専門（学校）という道もあるよ」って教えてもらいました。

リョウは、家庭の経済状況から美大への進学は厳しいという現実を高校教師から突きつけられた後に、デザイン系専門学校について調べ、オープンキャンパスなどに参加した。そして、「体験入学でこの学校（=X校）に来て、すごい雰囲気が良くて、ここにしたいという感じです」と語るように美大に代わる進路を見つけることができた。高校教師はリョウの興味・関心を尊重しつつ、現実的な代替案を提示するという進路指導をとった。

第2に、高校教師の援助をほとんど必要とせずに進路形成をするケースもある。「あんまり記憶にないんで、たぶん話し合いにならなかったんじゃないかなって気がします」と高校教師との関わりを振り返るフミヤは、具体的に次のように語る。

学校の先生に相談する前に、専門学校の方に体験入学とかが行って、なんかそこで面接、本番の面接を受ける前の練習みたいなので、良かったら入学させてあげるよみたい

な話で、それで合格をもらってしまったので。先生に相談する間もなく。

フミヤは、Y校の体験入学に参加し、模擬面接の段階ですでに合格をもらっていることから、早期に専門学校との繋がりを持つようとしていたことが分かる。また、ダイスケは高校のデザイン科という環境下で、専門知識を持つ高校教師と特殊な関わりを持っていた。

やっぱり美大に行った（生徒の）数が評価に繋がるというのはその通りなので、「専門学校ってお前〜」みたいな感じで。先生としてもあまり評価に繋がらないと。あと先生の認識としては、専門学校と高校のデザイン科はあまり変わらないぞっていう考えだと思うんで、何とも言えない感情を見せられて、そのまま見送られました。

ダイスケは、専門学校進学を歓迎される雰囲気ではなかったが、母親の言葉をもとに専門学校か美大かを検討していたため、高校教師の言葉はあくまでも冗談交じりの嘆きにとどまった。フミヤは早期からY校の体験入学に参加して、運営者と関わりを持っていたり、ダイスケはすでに家庭内で進路を考慮していたりと、専門学校進学の明確なビジョンを独自に獲得していたため、高校教師の支援をほとんど必要としない進路決定が可能であった。

以上のことから、高校教師は進路指導者が不在の家庭内において、十分に考察されていない点がある場合、それを補完する形で生徒と関わっていると言える。具体的には、自身の過去の語りや代替的進路の提案といった、生徒の進路の後押しや方向づけをするようなきめ細かな指導を行っている。ただし、生徒が専門学校進学の明確なビジョンを独自の方法で獲得している場合には、高校教師の関与は比較的小さくなる。

このように、高校教師はいずれにせよ、生徒の興味・関心を否定することなく送り出している。しかし、たとえばカナの担任の高校教師のように、いくら個人的な事情を理由に生徒の進路を応援したいからといって、将来性を検討させる指導をとってもよいはずだ。それでも高校教師が彼らの進学希望を承認するのは、生徒が受動的な態度で進路を決めると、卒業後に無気力化して学問を放棄する可能性があるからだと考えられる。労働政策研究・研修機構（2017）によると、高校教師の約7割が、進路選択における「適性」とは、「意欲」、「学力」、「興味（一般興味・関心）」だと考え、進路指導で生徒の適性を重視することは43.9%の教師が「おおいに必要である」、55.1%の教師が「ある程度必要である」と答えている。確かに、生徒の志望と適性が離れていると判断した場合、85.5%の教師が「適性に沿った選択も考えるよう忠告する」と答えているが、進学動機が明白であったり、主体的に進路設計ができたりしている彼らには、該当しないものであったのだろう。

4.3. 進学希望に反対する者との関わり

では、彼らの周りにはデザイン系専門学校への進学希望に反対する者（以下、反対者）は存在しなかったのかということ必ずしもそうではない。たとえばフミヤは、同居していた

祖母からY校への進学を反対されている。

祖母がいたんですが、断固大学に行くことを勧めてきて、専門学校なんて許さねえみたいなの、そういう雰囲気でした。(中略) たぶん、祖母は祖父と精肉店の店員やっていたんですけど、それで安定した職業に孫は就いてほしかったのだと思うんですよ。

フミヤは、祖母が亡くなったことで、「ちょっと言い方悪いんですけど、チャンスかと思って」Y校へ進学した。フミヤは、精肉店の店員であった祖母の境遇から忠告の意図を汲み取ろうとしつつも、ついに進路選択過程において祖母の言葉に惑わされることはなかった。また、リョウは、おじから進学希望を反対された友人がいることを語る。

僕の結構仲いい友達で、シュンタ（仮名）っていう子がいるんですけど、シュンタのおじさんがグラフィックデザイナーで、そいつはおじさんに憧れてこの学校に来たんですね。それで、行くなって決めた時に、親は別に何も言わなかったんですけど、そのおじさんからは「お前じゃ無理だ。やめとけ」と言われたと聞いたことがあります。

反対者の多くは、学費など進学の手段に関わる障害を問題としているのではなく、将来の安定という側面から再検討を促していると考えられる。しかし、いくら親戚とはいえ、祖母やおじの忠告には耳を貸すことなく、自分の意思を貫徹する姿が浮かび上がった。

彼らが反対者に耳を傾けない理由は、専門学校教育の構造が卒業後の就職に関してほとんど不安を感じなくなるように作用するためだと考えられる。フミヤは「授業でたとえばデッサンだったら、描いた作品の点数を、(中略) 65点以下だとDとか、80点以下だとBとかつけられて通知表になります」と語る。つまり、彼らにとって専門学校進学は、「毎日の授業がテストのような」緊張感を強いられ、絶対的に自分の努力が分かりやすい点数として評価される環境に身を置くことである。確かにフミヤのように「ゲーム業界のデザイナーとかって入るのが難しいんじゃないかな」、「ある程度のラインを越えた実力がなくて入れない」とデザイン業界の不安定さを漠然と想像し、現実を見据えている場合もある。しかし、ダイスケが「そこ(=実力不足)はもう授業入ってから頑張ろう」と語るように、努力が点数化される環境への進学を目指す彼らは、就職難を努力で克服可能な条件だと考えている。その結果、将来の不安は「あんまり考えてなかった」と語るリョウはさることながら、前述の通り、高校教師から生活の安定を優先してデザイン系への道を諦めた経験談を聞いていたカナでさえ、後押しを素直に受容し、自身の生活維持が困難となる可能性を排除するに至ったように、彼らは就職に関してほとんど不安を感じなくなる。

反対者の忠告は、こうした思考過程を経る彼らに対して、皮肉な影響を及ぼす。反対者の忠告は、「たとえ技術があったとしても、ポストが少なければ必ずしも希望職に就くことはできない」や「たとえ就職できたとしても、正規採用でなければ給料や待遇の上昇が見

込めない」といった制度的側面からの不安も含有していると考えられる。しかし、就職難を努力で克服可能とする専門学校生の前では、いくら将来の安定を説いても、それらは単なる自身の技能の伸びしろを否定する言葉に置換され、無力化してしまう。特に、第3節で確認したようなデザインを仕事とする人物、つまり努力が実を結んだ好例を身近な存在として感じている場合は、より反対者の意図が汲み取りづらくなってしまふのであろう。それどころか、反対者の忠告は、親と高校教師の承認を得ている者に対しては、かえって専門学校に進学して技術を磨こうとする動機として作用することさえ考えられる。

以上、分析結果から得られるストーリーラインは、図1のようにまとめられる⁸。

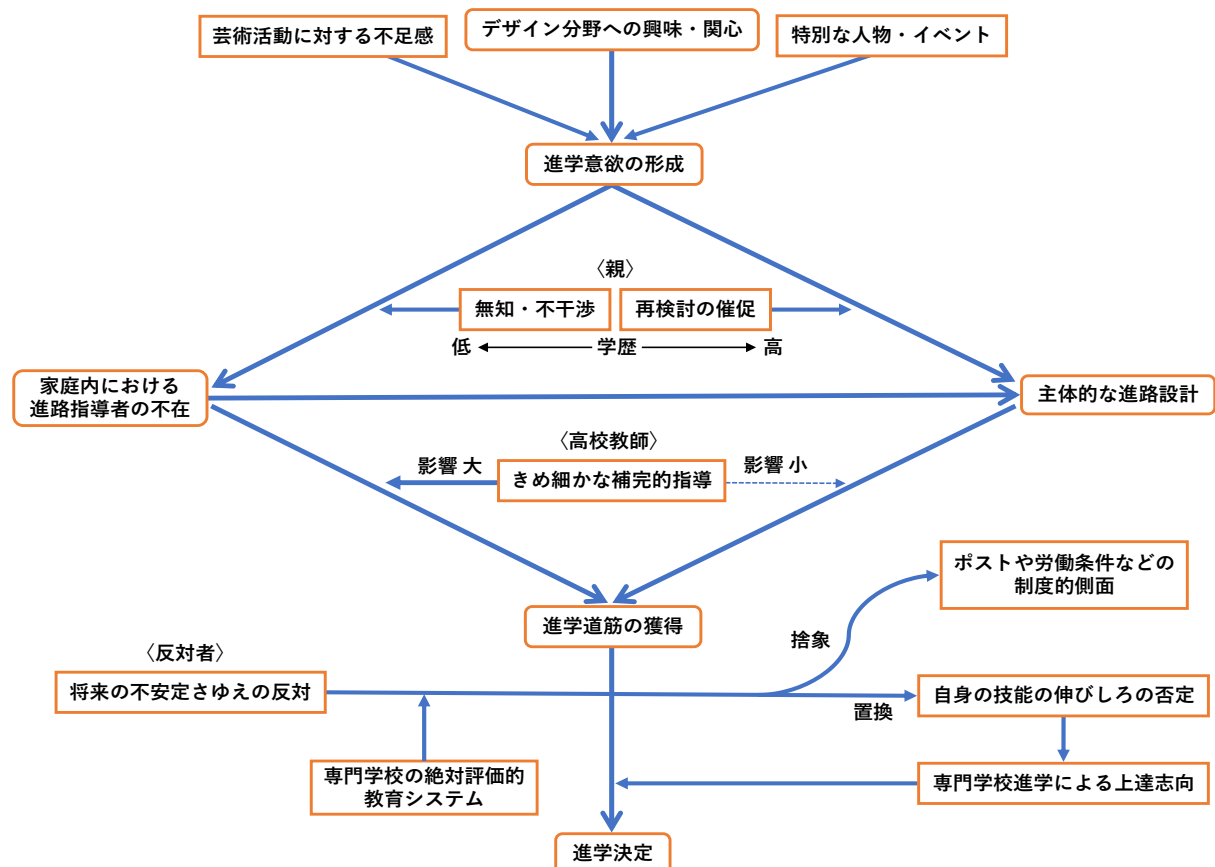


図1 分析結果から得られるストーリーライン

5. まとめとインプリケーション

本稿は、デザイン系専門学校生が高校在学時の進路選択過程において、親や高校教師などの他者とどのような関わりを持っていたのかを検討してきた。事例により明らかになったことは、次のようにまとめられる。まず、彼らは高校在学時以前の芸術活動に対して不足感を抱いており、特別な人物やイベントとの出会いを通して進学意欲を形成することを描出した。次に、学歴主義的な価値観が共有されない家庭環境と、基本的に生徒の意向を尊重してきめ細かな補完的指導をとる学校環境において、段階的に進学希望を承認されることを見出した。一方で、反対者も少数存在するが、絶対的な評価が付与される専門学校への進学を目指す彼らにとって、反対者の忠告は、単なる自身の技能の伸びしろを否定す

る言葉に置換され、かえって専門学校へ進学する動機として作用することを明らかにした。

本稿で得られた知見は、先行研究とは異なる専門学校生の他者との関わりを提示する。従来の研究では、親や高校教師などを包括した「他者」の関与をもとに将来の保障志向を獲得して進路選択していく生徒像が描かれてきた。しかし、本稿は、独自に形成した進学意欲を他者に承認されながら進路選択していく生徒像を描き、親と高校教師の関与に差異を認めて、進路選択に段階性を見出した。さらに、これまで着目されてこなかった反対者の存在を指摘し、独自の理論を組み立てて対抗する生徒像を描いた。

デザイン系専門学校へ進学した彼らは、以上のような親や高校教師との関わりを通して、1980年代以降に高校の個性化・多様化政策やキャリア教育が目指してきた生徒の興味・関心に基づく進路選択を体現していると言える。一方で、親や高校教師の関与は、専門学校へ進学できる環境を安易に充実させ、反対者の声に対して真摯に耳を傾けることを困難にするように作用しているおそれも浮上した。ベネッセ教育総合研究所（2016）によると、「文化・教養」分野の専門学校卒業生のうち、学んだ分野の関連領域で働いている人の定着率は、21.8%と専門学校の8分野の中で最低水準であった。この事実を踏まえると、自分のやりたい分野に執着し続け、他分野に対して排他的な意識を持つことは危険である。

無論、本稿は高校生の非学歴主義的な進路選択を無条件に否定したいわけではない。重要なのは、高校在学時の段階では、様々な進路選択肢を提示し、それぞれの進路の長所と短所を検討させ、ある種の妥協点を模索しながら進路決定できる教育体制の整備を目指すことである。デザイン系専門学校へ進学を決めた場合は、約8割の人がいずれ夢を諦めざるを得ない段階を迎えることを覚悟して、高校在学時から代替的進路をイメージしておく必要がある。漫画やアニメ、ゲームが日本を誇る文化になりつつある現在、デザイン系専門学校進学については、今後より一層活発な議論が求められるであろう。

最後に、本稿の限界と課題を指摘しておきたい。本稿は、先行研究では看過されてきた「文化・教養」分野のデザイン系専門学校生の進路選択過程に着目した点で意義を持つ反面、やはり得られたデータには限りがあり、今後は量的調査も合わせた研究を進める必要がある。また、長期的な視野で言えば、専門学校生が入学後にいかなる過程を経て、入学当初に抱いていた夢を諦めていくのかについても検討していく必要がある。

〔謝辞〕

本研究に協力してくださったデザイン系専門学校生4名に心より感謝申し上げます。

〔註〕

1. 本稿では、学校教育法第126条第2項に従い、専門学校とは、専修学校専門課程を置く専修学校を指すこととする。
2. 専門学校は、「工業」、「農業」、「医療」、「衛生」、「教育・社会福祉」、「商業実務」、「服飾・家政」、「文化・教養」の8つの分野に大別されている。

3. 鷺巢（2015）が対象としたビジネス系専門学校は、「商業実務」分野に相当し、非資格系に位置づけられているが、簿記や医療事務などの資格取得を目指しやすい環境であると考えられる。
4. 平成 29 年度専修学校各種学校調査統計資料によると、「文化・教養」分野の就職率は 57.1%と専門学校の 8 分野の中で最も低い水準であるのに対し、「衛生」、「商業実務」分野の就職率はそれぞれ 87.2%、81.5%と高い水準を誇っている。
5. 荒川（2009）の造語で、人気（Attractive）・稀少（Scarce）・学歴不問（UnCredentialed）の頭文字をとった、人気がある割には職業人口が少ない、なることが極めて困難な職業を指す。
6. 学園祭当日は互いに普段取り組んでいる学問分野について会話し、翌日以降もメールや LINE でやり取りを交わし、ある程度のラポールが形成されてから、正式にインタビューを依頼した。
7. 出身高校ランクは、2019 年 1 月 11 日現在、家庭教師のトライがウェブサイトで公表している偏差値をもとに、上位・中上位・中位・中下位・下位の 5 ランクに分割して割り当てた。
8. リョウが高校教師の助言をもとにデザイン系専門学校を志望してから、その後に改めて親の承認を得ているように、厳密には専門学校生は親と高校教師のそれぞれと交互に関わり合いながら進路を決定していると思われるが、ここでは大まかな傾向を捉えた。

〔参考・引用文献〕

- 荒川葉（2009）『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』、東信堂
- 公益社団法人東京都専修学校各種学校協会（2018）「平成 29 年度専修学校各種学校調査統計資料」（<https://tsk.or.jp/pdf/dw-toukeiH29All.pdf>, 2019. 1. 11.）
- 近藤博之・岩永雅也（1985）「専修学校進学の際の諸側面」麻生誠『専修学校制度の展開とその評価—短期高等教育の社会的基定に関する調査研究』（科学研究費補助金研究成果報告書）
- 武内清（1982）「親の学歴の子どもへの影響について」『武蔵大学人文学会雑誌』13（3），pp. 91-106
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構（JI LPT）（2017）「高等学校の進路指導とキャリアガイダンスの方法に関する調査結果」（www.jil.go.jp/institute/research/2017/documents/167.pdf, 2019. 1. 11.）
- 西田亜希子（2009）「専門学校は大学進学のための代替的進路か？—進路多様校における専門学校希望者の分析による検討」『子ども社会研究』15，pp. 163-178
- 長谷川誠（2018）「専門学校生の進学行動の背景にあるもの—栄養士養成課程 A 専門学校を事例に」『関西教育学研究紀要』18，pp. 17-32
- ベネッセ教育総合研究所（2016）「専門学校での学びと社会への移行に関するふりかえり調査」（http://berd.benesse.jp/up_images/research/pressrelease_senmon_20160818_21.pdf, 2019. 1. 11.）
- 矢野眞和・濱中淳子（2006）「なぜ、大学に進学しないのか—顕在的需要と潜在的需要の決定要因」『教育社会学研究』79，pp. 85-104
- 鷺巢禎江（2015）「専門学校生の進路選択過程にみる「あきらめ」と「志向性」—ビジネス系専門学校を事例として」『人間科学研究』28（1），pp. 15-26